

特異な詩の世界に光

『黒部節子という詩人』刊行

脳内出血で2度倒れ、亡くなるまでの19年間は眠り続けたまま、高い評価を得た詩人がある。愛知県岡崎市の黒部節子さん(1932～2004年)。今は著書が入手困難になっているが、光を当てたいと、名古屋市の詩人宇佐美孝二さん(67)＝写真＝が、評伝や作品論をまとめた『黒部節子という詩人』(洪水企画)を刊行した。「再評価する契機にできたら」と語る。



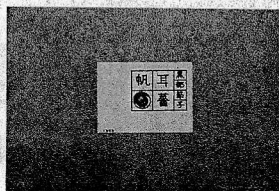
(松崎晃子)



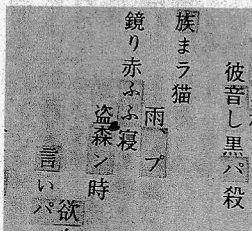
闘病生活に入っころの黒部節子さん(宇佐美孝二さん提供)

名古屋の宇佐美さん「再評価を」

黒部さんは、四十歳のとき最初に倒れ、五十二歳のとき二度目に倒れて意識が戻らないままとなった。この十二年間に、旺盛に創作した。そして意識のない本人に代わり、親しい詩人らが詩集を三冊刊行。「まぼろし戸」(八十六年)は日本詩人クラブ賞、「北向きの家」(九十六年)



黒部さんの作品集『耳簾帆〇』



『耳簾帆〇』の本文の開ページ。ところどころ穴を開けた穴から、次の文字が見える

は晩翠賞を受賞した。詩の中でもう一つ別の世界が展開されているような、不思議な詩が特徴だ。

「電車でおとてゆくと、暗い空のなかに窓が／見えた(中略)食卓／から一枚の皿がひら／ひらと落ちて、割れた。／電車は透きとおって、限りなく静かだった。／空の皿はかすかな音もたえずに、窓と共にあ／いまいな夜へすばやくかき消された。」(「空の皿」)

宇佐美さんは、黒部さんが病を境に自分だけの内面の世界から脱却し、神話の世界にも通じる普遍的な境地にたどり着いたと捉える。「普通に生きて詩壇と

交わり続けていたら、こういう詩は書いていなかったと思う」

黒部さんは現在の三重県松阪市に生まれ、東京暮らしをへて戦時中に故郷に戻った。松阪の飯南高等女学校(現在の松阪高校)のころ詩に目覚めた。結婚以降は岡崎を拠点に活動したが、生家や故郷・松阪への思い入れが強く、重要な題材として詩やエッセーによく書いた。

闘病前までは、モタニズム詩のような前衛的な文学運動の興隆を受け、実験的な作品も残している。『耳簾帆〇』(八十九年)は、表紙の書名の「〇」の部分かねじで、本文が印刷された紙とビニールをこのねじで留める特異な製本。しかも本文は意味を成さない文字の羅列で、ビニールにところどころ開けた穴から次のページの文字がのぞく作りになっている。

宇佐美さんは、黒部さんが編集していた詩誌に参加していた、二十年ほど前から黒部さんを研究している。今回の著書では、生い立ちや書簡を紹介し、代表作を詳細に分析している。自身の個人誌で発表していたが「作品を含め広く知ってもらうためにも、一冊きちんとまとめておきたかった」と書籍化を決めた。

黒部さんの詩を「日常の事物を詩的にアレンジするだけの作品」とは別世界で、日本の詩人がなかなか書けない世界」と宇佐美さん。海外の研究者から翻訳の申し出もあるといい、「まずは読めるよう、アンソロジーを刊行しなければ」と構想を語る。

大波小波

「父の娘」という言葉がある。森茉莉から矢川澄子まで、死んだ父親に見てもらいたい一心で創作を続ける女性芸術家のことだ。最近では、現在東京オリンピックのドキュメンタリー映画を編集中の河瀬直美。実の父親を知らずに育った彼女は、国際的監督になった

後でその居所を探り当て、父親が亡くなると、彼と同じ柄の刺青を背中に彫って供養とした。またその一切を「きゅんからあ」という

「父の生きる」を刊行した。『現代詩手帖』10月号に発表した長編詩「八月の光」の中で、父親についてより詳しく書いている。

「父の娘」たち

映画にした。伊藤比呂美はこれまでも父親が若いころ「ヤクザ」だったと公言し、その終焉に際して、感動的な日記

伊藤は新聞のデータベースを探索し、自分が知らなかった父親、伊藤一彦の経歴に到達する。どうやら戦後、銚子で高寅組組員とし

て活躍し、火野葦平の小説にも登場しているらしい。父親が没して九年、ようやくその生涯の封印を解き、真実を冷静に見つめる気持ちになったのだろう。詩人伊藤が今後、どのように父親を描いていくかが注目される。ちなみに「八月の光」とは、自分の出自が黒人であると思ひ込んだ青年を描く、フォークナーの長編小説の題名である。(羅)

2021.10.22